

資料(17)

「黒色戦線」第一巻第一号(昭和六年(1931)九月一日発行)

目次

- 一 無政府主義文学の理想と現実(鈴木)
- 二 アナキズム芸術運動について(山田一郎)
- 三 無政府主義の可能の為に(高久)
- 四 レニンへのクロボトキンの手紙(田村厚三)
- 五 2852番(李ネストル)
- 六 悪魔(ドストイェフスキー)
- 七 平原の木(小川未明)

茲では、一(無政府主義文学の理想と現実)、二(無政府主義の可能のために)の二篇を資料として掲出した。

無政府主義文学の現実と理想（鈴木靖之）

序

私は今、無政府主義文学の現実と理想を論ずるに当って、今更らの如く不甲斐なさを感ずる。と云うのは嘗て私は今から三年ばかり前に「黒色文芸」で矢張りこの「無政府主義文学の理想と現実」を論じ即ち「その理想と現実とは、現に實際を聞いていつある無政府主義者とその文学者等の大胆なる思索と行動との一対的感情によって無政府主義文学者の社会的態度を確固とその文学運動の上に実現し、無政府主義文学の新局面の展開を宣する日はそう遠くないであろう」と論述しているからである。然るに今吾々の無政府主義文学は果して如何であろうか、私の見解では依然として、その低邁の現象を打破し切れないうるかに見える。然しこまわなない、「相当の時間と熱度とを要求した卵は何時か遂に殻を破らなければならない日がある」として私は今、再び茲に無政府主義文学の現実と理想とを論ずることに無限の意義と誇りを感じる。

一 アナーキズム文学の問題

新居格氏は、読者の文芸欄「八月作品の分野観」——アナ派の分布図——の中で、「現文壇の分野に於けるアナキズムは片隅的である。アナキズムの分野には傑れたる詩人の多くをもっていることも事実だが、ブルジョアアナリズムの上では殆んど進出していない、ジャアナリズムの如きは問題にしないんだと云えばそうも云えるがアナキズム文芸運動がないかの如くにまで目につかないのは、彼等があまりに未成熟であるからなのである」と云い「しかしアナキズムはそれにも拘らず残存的存在だ——だがわが国現文壇特にそのジャアナリズムの分布図面では問題にならない」と云う。正にその通りだ、だが、それにも拘らず「残存的存在だ」はちとヒド過ぎる。何故なら氏の同分野観——青野の軽断——で氏はアナキズム文学は「今日を起端として発展すべき将来性のあるもの」と思っている。筈だからである。だが今、そんなことは如何でもない。

今、新居格が「青野の軽断」と言えば、青野季吉は翌日直ちに読売で「新居君にちつ」と応酬し、何んか「もっと勉強しましよ」と云っている。今その「軽断」と云い、「ちつ」と云うこの御両人の云い合いの中心点は果して何か？即ち、青野季吉が「改造」誌上で「農民文学の諸問題を論じているが」の中で「アナキズムの是非」は「理論的には半世紀前に討論終結になっていることだし実践的には今日までの労働者農民の運動が世界的規模において決定的に批判しつくしているのだ」と空威張りしたことに端を発しているものの如くである。

だが青野季吉がいくら彼の認識不足な「決定的批判で」で「実践的には」などと云ったところで、「今日まで労働者農民の運動が世

界的規模において」如何もなりはしないし、彼のボルの近視眼が世界の「労働者農民の運動を」如何見たって駄目だ、それは全くボルセビキの運動だと彼が定めて了つても、なほこれだけのものは偽り得ないであろう。即ち世界の労働者農民のアナキスト運動の動向について、これだけは文学論の上で全然的に否定することが出来ても、実践的にはビタ揺るぎもしはしない、否それどころか、そんなことを云っているとは彼は危険である。「世界的規模において決定的に批判しつくしているのだ」のに、アルゼンチンに於て、ブラジルに於て、イタリアに於いて、シベリヤに於いて、ウクライナに於て、最近の英領ビルマに於て、絶えず湧起しつつある労働者農民の一揆暴動、更らには、一昨年暮のアルゼンチン大統領ヒボリト、イリゴエン×撃事件、引続いてイタリア鉄傑宰相ムッソリーニ暗殺事件等々労働者農民の世界的団結運動とその勢力は、サツコ、ヴァンゼツチ釈放運動、ラドイツキー釈放運動、マラテスタ釈放運動等々引も切らずブラックインター・ナショナルの緊急事件として巻き起っている事実である。この事実を「決定的に批判しつくしているのだ」などと嘯いていられるのは彼が文学者だからである。だが今ボルのはしぐれの青野文学者を云々しているのではない。吾々の今論ぜんとするのは即ち「今日を起端として発展すべき将来性ある」無政府主義文学の現実と理想についてである。今吾々は直ちに無政府主義文芸戦線の現状に入ろう。

二 謂ゆる黒色文芸戦線の現状について

今日謂ゆる無政府主義文芸戦線？と云われ、又自らも斯く信じている人々の間に在って、黒色文芸と銘打っているものに左の新聞雑誌がある。

「自由聯合新聞文芸欄」、「弾道」、「黒道」、「婦人戦線」、「農民」。

その他、地方詩雑誌には、茨城の「創造の旗」をはじめとして、神奈川の「鍛」と「雑木林」、千葉の「馬」、群馬の「全線」と「蠅螂」、長野の「南信芸術」と「黒土」、福島「冬の土」、仙台「氷河」、北海道の「北緯五十度」と「泥炭地帯」、静岡の「黒流」と「ラソプに戻る」、愛知の「百姓地帯」、兵庫の「野良道」、徳島の「炎ゆる水」、愛媛の「南予芸術」と「防塞」、高知の「黒潮」、鹿児島「南方詩人」と「旋風」等々！（茲に挙げたのは私のクロ覚えのものだけである）

これ等殆んど点在に近い黒色文芸は今果して如何しているのか？

私は今茲にこれらの全てを批判する時間と余裕とを持たない、で至極端的に上述のものについて黒色文芸戦線の現状を見渡す、そしてその動向するところを見たいと思う。

「自由聯合新聞文芸欄」、茲にはアナキズム文芸の人々が苦心惨憺しているのを見る。小説、詩、散文、それぞれ腕の冴えを見せている。とは云うもののそれは三年此の方、どうどう廻りをやっている如く、何等新鮮なテーマもタクティも見せてはいない。

「弾道」は元詩人雑誌、そして次第に論調を帯びるに従って益々純理論雑誌の動向を見る。だがその「北緯五十度の仲間」との

「詩の形式」についての論争は至極退屈なものがある。黒色文芸詩論雑誌としての唯一のもの、然し茲に将来への何の進歩を見出すか、吾々は甚だ慙愧に堪えない。

「黒道」も詩雑誌、そしてそれは余りにも幼稚であり過ぎる。

「婦人戦線」、それは全然女人帝国主義とも称すべく、女大学の感に漏れない。我々は或時「女大学読んでも見たが夫一人は守られぬ」と云う俗語を聞いたことがある、彼女はアナキズム一人を守り切れず、サンデカリズムを取り込み、これをアナキズムと共に混同している。それを指適されてくつてかかるところクソもみも見さかいつかないのは惜しい。そして「婦人戦線」はアナキズムを装いつつ「男性清算」を標語としている偏見的——資本主義にゆがめられた根性の中に独りよがりなオダを挙げているのはいみじくも見にくき次第である。

それは兎に角これが彼女等の主張するネオ、ロマンチズムの文学であろうかと疑わざるを得ない。斯してこれもまた古きアバズレ女の型を一步も出でざるばかりでなく、何等新時代への予想を約束するところがない。

「農民」は元「農民自治会雑誌」、今は無政府重農主義に拠る農民主義をモットーとする新百姓の殻をつけて、ノートに腰にはさんで未だその野良道をはいかいしているに過ぎない。クオヴァヂス、「農民党」？と云うべきであろう。

其の他詩雑誌については茲に略す。

福島「冬」の「第二号佐藤の「農民文学」に対する提言」は、最近アナキズム文芸についての一訂正とも云うべく、其の点については無論異論を持たない、かと云って我々の黒色文芸について別に新しき動向への主張を見ることが出来なかつたのは残念である。

斯くて吾々の黒色文芸戦線に於ては、人々は今、永き戦いと疲労、時に倦怠と自棄とに憑かれて深き冬眠の中に寝返りを打っているかの如くである。これを今給じて概評すれば、彼等は未だ、単に存在的に力みつ独りよがりの中に自己陶醉の夢をむさぼっていると云える。云わば「文学的手淫」の域を一步も出していない。

吾々は今茲に、これが我々の黒色文芸戦線の現状であると告白するのは苦しい。だがこの現状を如何しよう、吾々は決してボルの如く虚構の中に自ら陶醉するお目出度きを持つことが出来ないものである。

然し吾々は決して悲観することはない、悲観は絶望へ、そして絶望は自殺へ、そしてそれはおあいだ、だが吾々は古き殻に決して固執を持つな！寧ろその殻を蹴れ！と云おう。

我々は今古き殻を蹴って立ち上る。この時既に我々には新しきスタートへの心構がある。

三 無政府主義文学の歴史的役割

我々の無政府主義文学運動はその初め「文芸解放」に始まった。そして前記「黒色戦線」へ、そして今又三度此の運動のスタートを

切る。

今この運動のスタートを切るに当って、我々をして今一応その過去の歴史的経過を批判せしめよ。

一 「文芸解放」時代

その頃我々の社会文芸の人々はプロレタリア文芸の方向を主張し出した。それは大正十三年暮の頃、謂ゆる「種まく人」の人々が遂に「文芸戦線」と銘打ってそのプロレタリア式機械文学を提唱した頃、その派の人々は口ぐせのようにコミニズム文学と云う論法を持ったものである。即ち前記斬断者青野季吉の「文芸戦線」創刊号に於て論じた「自然生長と目的意識」と称するいと怪しげな論理は即ちその派（謂ゆるコミニスト派）の結晶的主張であった。この時、世人は恐らくそのペラ棒なる非理窟に驚かないものはないものなかつたであろう。その云うところは即ち文芸運動の「政治闘争への目的意識」だつたからである。これ世に云う「転換期の文学」と称する代物である。

然るにその当時既にその「自然生長と目的意識」に極力反対した一派があつた。即ち今日のアナ派の人々がそれである。その人々はこの怪げなる弁証法的機械論による文芸運動の政治闘争への目的意識を拒否し、直ちに「文芸解放」に拠つて戦つた。今その「文芸解放」創刊号は宣言する。

一、我々は詐欺的政治運動から文芸を解放する。

二、我々の文芸は自然発生に拠る目的意識を強調する。

そしてその創刊号全面には「文学の政治陰謀的傾向について」、「自然発生と目的意識」、「政党派文芸の奸計を観破しろ」、「強権と自由」なる表題の下に論じられている文芸解放の主張を見ることが出来る。

斯くしてアナ派の人々は「自然発生と目的意識」の主張を、ボル派の陣営に手擲弾の如くに投げつけた、茲にアナ派の文芸運動の出發がある。そして茲にアナキズム文芸運動の最初の意識的出發があつたのである。

我々は今茲にその「自然発生と目的意識」について詳論する暇を持たない、でその「文芸解放」の中から抜き書きする。

「作家が自然発生的要素を拒否し、目的意識の把握、それは至極結構なことだ、しかしながら、それが何故に自然発生的であつてはいけなうとしている（そうである）、目的意識の把握、それは至極結構なことだ、しかしながら、それが何故に自然発生的であつてはいけなうのか、自然発生的要素を何故に拒まなければならないのか、自然発生的な境地に於ては遂に一つの確固たる目的意識をも把握することが出来ないのか、目的意識そのものが我々自身の胸裡に於てすらも自然発生でないと云うのか、被征服者、被搾取者階級の中に於ても、それは自然発生的でないのか、もしそうでなければ何処に自然発生を拒む理由があるのだ。自然発生的要素を拒否するものはつねにただ支配者やブルジョアあるのみだ、被征服者被搾取階級の意識をたくみに制限しているところの支配者の策略あ

るのみだ。自然発生的要素を拒む彼等はまったくもって、飛翔せんとするものを抑えつけ、生れ出でんとするものを未然に葬り去り、来世の幸福を誓うことによつて、宗教的慰安をあたえつつあるところのブルジョアに酷似しているではないか、彼等の所謂目的意識とはとりもなおさずこの来世の幸福以外の何物でもないのだ。

次に我々は「文芸解放」第四号が「アナキズム芸術は確立し得るか」を論じ、勿論「アナキズムの芸術理論はこの国のみの特殊な現象として起つたものでない」ことを論じ、当然アナキズム芸術論は確立し得ると論じているのを見る。即ち、一、アナキズムは芸術批評の原理たり得るがゆえに！二、アナキズムは芸術創作の動機たり得るがゆえに！三、アナキズムは社会的共感性を保有するが故に！等々について広く嚴重に論及している。

斯くして我々のアナキズム文学運動はその第一期的即ち根本原理の基礎的事業を果したと云うことが出来るであらう。勿論我々はその実際に於て創作に、論文に、我々独自の活動即ち創造的活動を以て為し来つた所である。

二 前紀「黒色戦線」時代

我々の黒色文芸運動の第二期的役割とも見らるべき事実は即ち、関東社会芸術家聯盟？（S・A・F）の創立と解散、而して前紀「黒色戦線」の創立に初まると見て差支えないであらう。そして此の時代は最も芸術論の確立にその主力が注がれたものである。

「昨年の暮から今年昭和三年の始めにかけて、謂ゆる無産派文芸家の一部の人々の間に、頻りに次のような事が言い交された。

即ち「我々は芸術家たる前に、先づアナキストでなければならぬ」

そしてそれがまた文芸解放の一部の人々によつて、その評論や論文の中にも一つの権威を以て主張されたものだった。

「無政府主義文学者は、先づ無政府主義者でなければならぬ」此の主張は当時謂ゆる無政府主義文芸団体？関東社会芸術家聯盟の一部の人々の強調するところとなつて、遂に雑魚の集団の如き社会芸術家聯盟を宣するに至つた、これ今年初頭に於ける無政府主義文芸運動の一断面の実相である。

それ以後、無政府主義文芸運動は一の過渡期に直面した、即ち戦線内部に於ける変節漢、詐偽漢の簇出とこれが徹底的驅逐との實際は理論と行動との一体的感情によつて実に峻烈を極めたかの観があった。そしてその事実の結果、或者は遂に無政府主義文学を去つてマルキストコンミニズム派に投じ、或者は全く灰色を装うて猫婆をキメ込む、かと思ふ中に何時か全くこの文芸運動の戦線から遠落いて没落して行く幾多の徒輩を見るに至つた。そして今、その残つた幾人かの文学者等は勇敢にも無政府主義文芸の古壘を守つて戦いつつ、今や峻烈なる無政府主義運動の渦中に其の身を投じた、その中の幾十の人々は急速に無政府主義運動の實際に接近して来た。斯くして無政府主義文学は、兎に角も無政府主義運動の本道に引かれて来たのだ、そして今、僕は「無政府主義文学は無政府主義運動の實際から創造されるものでなければならぬと主張する」「黒色文芸」拙著、

そしてやがて前紀「黒色戦線」がもり上げられるに至つたものである。

「我々の一九二九年は、当に二月の嚴冬を経過した。昨日の戦線は明日への連環の中に現在を過程しつつあるとき、既に「黒色文芸」、「二十世紀」、「黒蜂」の総合は我々の「黒色戦線」の成立を遂行した、これ即ち我々の戦線の要求の結果に外ならない。とは云えこれこそ我々の自由聯合の現実である、当に今期に於ける文芸思想運動の史実的第一頁である。今や「黒色戦線」の峰起は文芸思想運動の整調の實際と熾烈なる闘争の事実とを以て、層一倍、果敢なる実行と新事実の獲得とを實証して行く、敢て「黒色戦線」の實踐を期す」

これ前紀「黒色戦線」創刊号の巻頭言である。

我々はこの創刊号巻頭第一頁から既に「クロボトキンの芸術論と現代との交渉」に出發していることを知っている、而して此の時代の運動が前述したるが如く、専ら「無政府主義芸術論」と「無政府主義文芸批評論」に主力を注いでいるのを見る——第四号「無政府主義文芸批評論」中に。

一、無政府主義文芸批評とは何ぞや。二、無政府主義文芸批評家の態度。三、無政府主義文芸批評の規範。

我々は今この「批評の規範」の中に次の数ヶ条を発見する、

1 プロレタリア善と美との一致が体现されていなければならない、2 強権に対する批判と反抗がなければならない、3 奴隷性の全き排棄が体现されていなければならない、4 特定の効果を狙つて書かれたものであってはならない、5 理想と生活との一致した人格が体现されていなければならない、6 芸術作家の価値決定は、作家の統一的全体的上に下されなければならない、7 最も透徹したる無政府主義哲学が具現されていなければならない。」

斯くて我々の無政府主義文芸運動は益々理論的に發展し、遂に「理論の理論倒れ」に陥つたかの観を呈した。然し我々は心配する必要はない、何故なら幾ら我々の無政府主義文学が理論倒れに陥つたからつて、彼の謂ゆるプロレタリア文学論の如く、——世に有名な平林の二元論の如く——文芸の「政治的価値と芸術的価値」を論じ、遂に「馬を火鉢で数える」ような馬鹿化たことはしないのだ。

兎に角「理論の理論倒れ」は前紀「黒色戦線」に於ける文芸を放棄せしめ、「黒旗」なる無政府主義戦闘誌の役割へ進展し遂に文芸運動と訣別した。

以来既に三年、茲に黒色戦線に於ける文芸の分野の沈潜期のある所以である。然し我々の永き沈潜期の鬱積は今やその理論的動向よりも寧ろ實際的、即ち創作的實力に於て黎明を迎えんとしていると云うことが出来るであらう。

三 黒色文芸戦線の現状と主張

我々の今日に於ける文芸思潮の動向について、今なほ議論区々に別れ、甲論乙駁また今止むを得ないところである。それは当然この

文学が持っている「自然発生と目的意識」に其の根本的原因がある。即ち「自然発生」に於ては当然「アナキズム」とは、その本質に於て単なる反逆運動ではない、単なる経済的階級運動ではない、自然の、宇宙の道徳に則したる倫理運動である——アナキズム文学はその本質上単なる階級反抗文学であつてはならない、より広汎な即ち宇宙的な人類の文学でなければならぬ、——「冬土」八月号佐藤の全体性——主張と、目的意識に於ては当然「今日アナキズム」は資本主義現実に反逆する。民衆の創造的欲求はその生活態度は無論自由聯合によつてのみ持続されている、にも係らず今日叛逆は民衆の生活態度である、この欲求、この態度なくして民衆は絶対に解放されない、アナキズムこそ今、叛逆する民衆の唯一の武器である。その戦術である——アナキズム文学は当然自由社会実現のために資本主義強権主義に挑戦し、叛逆し、戦い勝たんとする民衆の文学でなければならぬ、反抗の文学でなければならぬ——「黒線」(昭和二年)——拙著の謂ゆる自然発生的目的意識の強調と茲に佐藤の自然発生との間に、実に越ゆべからざる創作態度の上にも当然二つの開きを生じ、或は行詰りを生ぜしめる。

我々は此の事実は余りにもアナキズムを偏則的に解釈し、或は決定論的独断の上に押し挙げて了つて甲はかく、乙はかくと各その重点を両極端に求めた点に在ると思われる。然し、アナキズムは民衆の生活の自由聯合的事実である。飢餓と強権との脅迫に苦悩する民衆の生活事実から、相寄り相扶けつつ生きんとする彼等の感情の中に何うして芸術がないと言えよう？ 我々は今こそ謂ゆる過去の遍狹的、極端的理解を止めて、総合的、全体的、人間的態度で押し進むべきである。我々は今こそアナキズム芸術の、人類の芸術を要求する時である。

斯くて我々のアナキズム文学の現実に於ける動向は、人類人の芸術の要求を理論的に、よりも實際的に、よりも實際的に、よりも作品の上で、その実力を示すべき時に直面している。

今日アナキズムの實際運動が理論でよりも行動で、觀念でよりも具体で、押し進められるとき、我々の文学運動もまた、その方向に表われるということは決して怪しむに足らないであらう。

4 無政府主義文学者の態度について

我々は今、我々の黒色文芸戦線の此の低廻的現象が斯る雰囲気になつては如何なる意味に於ても決して喜ぶべきことではない。だが然し此の現象を打破するためには、それがアナキストであらうと、またなかつと、宜しくこの黒色文芸に立触る人々が、強権の一切の觀念を打破し集団的衷傷から全く解放され分散的自主即ち自力に依つて起つ自主行動の方向にその歩調を見出すものでなくてはならない。然れば個性の無限の發展、各個の自由細胞的表現、それは必ず人類人の芸術の方向に於てのみ創造されるものであらう。

今、人類人の芸術とは即ち民衆の芸術である。民衆の芸術と言っても無論單なるプロレタリア階級意識の強調の芸術ではなくて純粹の民衆の芸術のことである、それはアナキズムの芸術である。今民衆をして統一的に、單に集中的——プロレタリア意識の昇揚——

たらしめることなくして、自ら人類人の意識に立たしめこれ等の階級芸術を壊滅せしめ、全き真実の芸術を創造することであり、然り人類人の芸術を創造することである。

先づ第一に階級的觀念を芸術に持ち込んで出来たのはプロレタリア芸術である。然しそれはマルクス主義の芸術であると言へる。だが併し我々は今更ら階級的觀念の注入のためにする或いはそれによつて出来た芸術の如きは実に陳腐以外の何物でもないことを知つてゐる。そしてそれは遂に行きつまるであらう。彼等は常に集中的、戦術的、教化的、利用主義的芸術に終止する以外はない。そこには勿論卓越個人の、そして号令的、組織的、指導的、アジプロ的芸術の域を出ないであらう。そこに彼等のプロレタリア芸術の使命があるんだと言へばそうも言へる。だがそれが真実に我々の求めた芸術であらうか？ 真実にはプロレタリアはプロレタリア芸術を好まないで、より民衆の情感の豊裕な芸術を好む、たまたまブルジョア芸術をさへ多分に求めている事実を我々は無数に見かける、茲に菊地や久米や里見等の文学が読まれている理由がある。即ちプロレタリア文学時代に於てなお通俗文学のより倍数的に読まれる証拠だ、大衆文学の全盛した理由また然りである。

我々は今プロレタリア文学の反動的現象をのみ認識しこれが昇揚を見逃すほど認識を誤ることはしない。我々は民衆が真に共感する所の民衆芸術が謂ゆるプロレタリア意識の昇揚の文学ではなくして真の民衆の欲求する人間的芸術、人類人の芸術であると言ふのだ。

人間の芸術、人類人の芸術これこそ我々の明日の文学としての問題の焦点に置かれてゐるアナキズムの即ち此の芸術に外ならない。我々は前に分散的自力主義自力による自主行動に依つて生き、且つ戦う個々の、そして各個の団結的自主的行動の自由細胞的表現こそ我々のアナキズム芸術の態度であると言つた、今後の我々の芸術は益々個々人が自由細胞的表現によつてその個性の表現を無限大にまで發展されるだろうことを期待して疑わない。そこでは卓越個人や、社会主義的、結成的、集中的、組織的、機械人形的、即ちロボット踊りを見ないで済むだろう。舞台は広い、どの一人も個性的に、性格的に、取扱われる事件と共に躍如としてその各個の能力的役割を完全に果すであらう。

5 アナキズム文学の要求

我々のアナキズム文学は社会文芸である、民衆芸術である。人類人の芸術である。人類的の芸術である。そして分散的、自主行動によつて自由細胞の役割を完全に果す表現に依つて創作される芸術である。我々はこれを理論でよりも實際に於て見度い、今まで、よき芸術と称され、また民衆の共感性の中に完全に受け入れられた芸術は即ち人類人の芸術であることを思い出せば充分である。

又創作に當つて先づ何よりも先に、如何に一個人を、又その事件を巧に表象するかということに骨折つていたのは、もう昨日のことである。今日ははや一個人も、その事件も、何もかもかかる特殊な効果を狙つてゐる必要はない。即ち、如何なる人物でも、如何なる事件でも彼の感じたところによつて、彼の意の赴くままに押し付けにやつつける。そこに何が出来るか、民衆の求めている、民衆の共

感をそそる、そして真に民衆と共に在り、共に起ち、共に戦い、共に倒れ、共に勝つ人類の芸術が創造されるであろう。

ここではもう民衆の意思を、鼻息を窺い立てていなければならない、尤もそれは民衆と共にある人でなければ出来ない芸当だ。プロレタリア（前衛分子）になつて了つては駄目だ。それでは偽ばかり書かなくてはならぬ。ところが民衆というのはどれが偽かが誰より早く分るのだから仕方がない。

ここにアナキズム文学がある、それは民衆と共に、民衆の一人として、民衆の中から、何者に向つて誤またず発言するかをよく知つていて、然り自由細胞的に、凡ゆる民衆と共に又その民衆の意思で、無限に民衆の実感の中に在つて、明日の発言を準備する人々によつて堂々と創造されていくであらう。

結論

今、新しい黒色戦線は敷かれた。それは幾多の無政府主義文芸の諸問題を蔵して、多端な戦線は今めまぐるしく廻転し始めた。我々には出発する、理窟でじゃない實際でだ。今度こそは我々の黒色戦線は強×主義の牙城にまでガッシリと張りつめる、然うだ、そこでは最早や理窟は抜きだ、力だ、所詮は力と力の問題だ。

斯くて我々は来るべき解放の日を白兵戦のために備えるであらう。——一九三一・八・五——

無政府主義の可能のために（高村英作）

有望視されていた最近スペインに於けるアナキズムの革命運動も遂に何等の収獲を見なかった。（スペインは世界の同志達から期待を有たれていたのだ、勿論其れは漠然たる期待の程度では有ったが。）独りスペインのみでは無い、最近の僅々十五年間に於て、即ちロシア、ドイツ、イタリー、印度、中国等々、アナキズムの革命運動は悉く失敗の歴史であつた。その時に世界地図の上に革命の可能性をもつ国として、唯一つ残されているのは何処であるか。その唯一の国は吾等の国より他にはない。ただ一つの而して最後の此国に於て若しアナキストの革命運動が失敗するようなことがあれば——その杞憂は我々にとって大なる苦痛である。恐らく人類の大なる不幸であらう。この故に、我々は大なる×××もとに、涙ぐましく×××をつづけているのである。

この時にあたつて、一つの注意（勿論戦線の内部にあつては必ずしも事新らしい警告では無いが）を喚起する事は決して徒らなることでは有るまいと信ずる。

クロボトキンは無政府主義思想の完成に貢献した。然し乍ら其故にクロの思想のすべてが正しいと我々は決して信じない。クロは民衆を余りに道徳的なものとして見た「無政府は自然の秩序である」けれどもそれは余りに薔薇色のイリュウジヨンでは無かつたらうか。啓発されざる儘に放任されている民衆が、クロの説いたように、先験的にアナキを意欲しているか何うか。権力を××さえずれば、それで凡ゆる人々が直ちに兄弟のように愛し合い、他の利害を自己の利害のごとく欲するようになるかどうか。クロは單純に民衆を美わしき徳性に還えるものとしてのみ認識した。名著「相互扶助論」から「倫理学」に至るクロの一切の思想は、つとめて民衆から徳性のみを発見しようとしている。

民衆相互の相克する闘争は、単に今日の支配社会のために余儀なく行われる現象にすぎぬ。クロの把握は此処に止まった。而して、余儀なく行われたにせよ、その長き相互闘争の歴史が人間の本性にいかなる歪曲を与えたかに就ては、クロは盲目であつた。然しながら、この点について正確な把握なくしては、まだ無政府主義は一個のユートピアに止まるものである。それは未だ牧歌的解放論である。

我々は、民衆にあらゆる徳性、あらゆる能力が備わっている事を信じたい。其れは何と美わしい信頼であらう。然しながら、我々は決して先入主を以て意欲的に事物を解釈することは許されない。厳正冷徹に事物を客観しない限り、其の正当な認識なくしては革命は失敗から免れうることは出来ないものである。

我々のマラテスタはこの点に関して凡そ冷静な観察を下している。彼は言う、「人類のすべての欲望をなす物質的欲望は、人類を結合させる代りに、他の人々を屈従させることに依つて遂げられた。斯くして、人類が獸的祖先から遺伝された残虐にして非社会的な本能が再び威を逞しくするのである。即ち人類は、弱者を自分のもとに強制し、同胞と友誼的に結合する事よりも、むしろ人々を支配する事を好む。」（マラテスタ、無政府主義論、第一篇第三章）

マラテスタは斯くてクロの樂觀主義を排斥したのである。而して、バクーニンは？バクーニンも民衆に対して薔薇色のオプチミズムを有たなかつた。而して我々の問題は、バクーニンが此問題に対して如何なる思想を把握したであらうかの一点にある。（我々は最も興味ある——真剣なる問題に直面しているのだ。）バクーニンの努力は、革命を可能にする準備の為の努力よりも、唯革命の直接的実行のみの努力である。バクーニンの努力は、民衆を暴動に駆り立てるアデーションにのみ集中された。之れ彼が「実行家」と言われる最大の理由でもある。

社会の変革は、その民衆が今日有てる意識的若しくは無意識的に抱懐する思想によつて、次の社会が決定される以外には有り得ない。いかに既成権力が倒壊しても、民衆それ自身の裡に権力思想がある限りに於ては、次に生れるものは権力社会であるより他はな

い。いかに既成資本家を一掃しようとも、民衆の中に経済的新建設の明確なる目標が把握されていない時には、経済事態は単にふたたび旧態に復活することが見られるばかりである。新しい社会の生れ出るいかなる希望も有ら得ないのである。

バクーニンは此事を知らぬ筈はない。然し彼の把握は、此点に於て峻烈でなかった。少数の有力なる革命家の努力——少数者の煽情によつて革命を成功させることが可能であると考へた。革命家は風であり、大衆はなお草のごときのものであると考へた。クロとは異なつた此点に於て、バクーニンはまた蓋微色ではなかったか。無政府主義は如何なる牧歌的内容に止まるものではない。回顧的な単なる自由、単なる連帯への憧憬ではあり得ない。自由と連帯を可能にする為の厳正なる思想である。一個の明確なる思想である。決して単なる牧歌的情緒ではない。してみれば、民衆の胸の中に、厳正なる無政府主義の思想を叩きこまぬ限り、民衆それ自体のうちに、黒色思想の広汎な拡がりを有たぬ限り、我々はつねに苦杯をのまねばならぬ運命を甘受せねばならぬ。革命はいつの時でも失敗の繰返しに終わる他はないのである。明確なる将来社会の概念を全民衆に培養しなかつたバクーニンはアナキーへの進展を「無政府国家」によつて到達せしむるより他に道はなかつた。然しその誤謬は明白に指摘されている通りだ。

民衆に凡ゆる徳性、あらゆる能力が備わっていると誤信したクロは、そのオブチミズムの故に救われない。其誤信をしなかつたバクーニンは独裁を強行するより他に道がなかつた。その何れも、此問題の限りに於ては我々の信頼を博するものでは有り得ない。

今や我々は明確な認識に立たねばならない。この国の事態は早晩××することが××されている。我等いかに為す可きか。把握されねばならぬ問題は、無政府主義思想の民衆への絶大広汎な拡がりを有たねばならぬという一事にかかる。我々は此一事を新らしく深大に認識せねばならぬ。「判りきつたこと」然り「判りきつたこと」である。而も猶、××の達成は懸つて此問題に有ることを思えば、叫ばれ過ぎることはないのである。

奴の奴隷根性は鎖の中ではない。

奴自身の腹の中にあつたのだ。

(アメリカ、プロ詩集、オープンハイム)

無政府主義思想の民衆への透徹によつてのみ革命の可能性がある。

然しながら全民衆への透徹の問題は如何に把握されるか。且つて八太舟三君は「サンジカリズムの検討」を書いた。今日多くのサンジカ主義者は、労働争議の闘争が、結果に於ては単なる改良、若くばいわゆる妥協闘争にすぎぬことを知つた。知つて何故彼等は依然として諷刺的にサンジカリズムに魅力を持つて有るうか。

労働組合という一の組織に労働者を吸収しなければ宣伝は不可能と、彼等は考える。同様の思想のもとに消費組合を作り、農民組合を作り、協同組合を作る。日常問題の有利な解決を餌に大衆を組織に獲得しようとする。「その目的は組織への吸収であり、吸収の必

要なる所以のものは、無政府主義の宣伝にある。組織に獲得せず何うして無政府主義思想を伝えることが可能であるか」彼等はサンジカを此立場に於て把握する。然し、之れはまことに偏つた思想と言わねばならぬ。

より広汎なる大衆への呼びかけは、決して、民衆のうちから僅少なる人々を組織に吸収して為されるところの者は極めて僅少である。我々はいかなる消極手段に囚はれず、真の宣伝——全民衆への呼びかけを精力的に行なうべきですべての全民衆にアナキズムを伝えること。例えばたつた一人の青年を見計つて無政府主義小冊子を与える事なのであるうか。決してそうでない。我々の目標は全民衆である。今日一般に行われているような方法——誰ともなく（勿論、我々は行為が誰によつて為されつつあるか知らない。性質上秘密運動である事は言を俟たない。）縦横無尽に撒布されつつあるビラ、人々の眼につき易い個処への無数なポスターの貼布、どこからともなく各戸に配布されているリイフ、こうした類の無限の行動はやがて民衆に知らしめるであろう。無政府思想の拡充は深大に広汎に敷衍して行く可能性に富むものなる事を注意せねばならぬ。また、より大胆なる行為を仲介としての、知らしめる手段も発生して行くであろう。

広汎なる拡がりは、決して、組織への吸収によつては果たされぬ。農村と都会を通じ、此方法の無限の実行は、何にもまして成果を獲得する方法である。我々は広汎なる民衆層のうちに黒色思想のビマンを果たせばよいのである。決して日常的に具体的に何人かを数量的に獲得することではない。我々の革命方法は小党派によるもので無く、民衆運動の革命的発展に於て予望するものである。

勿論、一人から一人へ堅実厳正なるアナキストを作ること而して、之等の革命分子が革命の機運を推進する為には××的な××が採られねばならぬことは、我々の基本的な諒解するところである。而して、其れは今日の命題の一つである。

我々に蓋微色の夢は無い。我々は民衆の何であるかを知らねばならぬ。把握せねばならぬ問題は、より広汎なる全民衆への無政府主義思想の浸透努力の再認識と、其実行の無限なる努力の問題である。

(八、一七)